2章

【問題】（演習／共通問題1）

出典…石川淳『敗荷落日』／東北大学　01年

文章略解

戦中の永井荷風は、堅く自分の生活のワクを守ることによって荷風なりに抵抗の姿勢をとり続けることができた。その結果、彼の文学は災禍の時間に堪えることができ、またその作品を肯定的に評価することも可能である。しかし、戦後の荷風は、同じ態度によって精神を硬直させてしまっており、その作品には芸術的意味を認めることはできない。

解答

問1　他人の所有物や精神は侵さないが社会体制の変化には対応不能な、脆弱で偏狭なもの。〔39字・解答例〕

問2　戦争という歴史の断絶（25行目）

問3　経済的にはともかく、既に意味を失った人生観を頑なに守り通すという精神的な柔軟性のなさ故に死んだから。〔50字・解答例〕

問4　戦中の荷風は自分の生活のワクを守ることで抵抗の姿勢を示すことができたが、戦後の荷風は戦中と同じ姿勢を貫くのみで精神の柔軟性を欠いているから。〔70字・解答例〕

問5　自分の精神を守り通した、江戸以来の系譜をひく随筆作品として肯定的に評価している。〔40字・解答例〕

【問題】（自習／共通問題1）

出典…柳田国男『喜談日録』　／　一橋大学　99年

文章略解

利用者が限られている書き言葉の衰退よりは、国民総体の言語能力の低下の方がはるかに重要な問題である。いわゆる言文一致運動は、口言葉の基盤が脆弱なままに行われたため、誰も彼もが他人の文章から言葉を借用して話をする傾向を生んだ。口言葉には日常とよそ行きの二種類があるが、外形教育によって後者だけが重んじられることとなった。日本人は意味もわからぬままよそ行きの表現を使う九官鳥になりかかっていたのである。

解答

問1　A＝慨嘆　　B＝素養　　C＝普及　　D＝粗末　　E＝悲惨

問2　書き言葉〔4字〕（1行目）　　問3　エ

問4　あらゆる人が書き言葉の文末を改めただけの表現で話す時代。〔28字・解答例〕　　問5　イ

問6　日本人の多くが、他人の文章から借用した儀礼的な言葉を意味の分からぬまま用いようとしていたこと。〔47字・解答例〕

解説

問2　「本文中」の言葉を「書き出せ」という指示で、なおかつ「五字以内」という長さの制限がついているので、形式面から絞り込んでいく作業は比較的容易にできよう。

内容面では、傍線の付されている語が指示語（連体詞）であるから、その指示内容を追う形で文脈を検討していけば解答に至れ

よう。この傍線部分は、直接には前の文の「漢文とか擬古文とか」（2～3行目）を指している。この「漢文とか擬古文とか」は、さらに前の「書いたもの」（2行目）・「書き言葉」（1行目）の例として挙げられているわけだから、解答として抜き出すべきはここになる。「もっとも適切な言葉」を吟味するなら、傍線部分が「国民総体の言語能力」（3行目）の表れるものであることに鑑みて「言語」に相当するニュアンスをより強く帯びた「書き言葉」の方がベターであろう。

問3　傍線部分の「也をであるに改め、でありますに取り替えた」という表現の吟味がポイントになる。この傍線部分の出てくる段落は「いわゆる言文一致の運動」（11行目）の難しさを述べたものであるから、この部分も「文体の変化」という観点から吟味していくのが適切であろう。

「也」は文語における断定の助動詞「なり」、「である」は口語においてそれに相当する表現（断定の助動詞「だ」の連用形「で」＋動詞「ある」）である。「であります」はその「である」にさらに丁寧の助動詞「ます」を接続させた形である。これらを見比べれば、傍線部分の意図するところが、「なり」という文語の断定の助動詞で語尾を結ぶところを「である」「であります」と口語調に置き換えただけ……という意味であろうことがわかる。このニュアンスに相当する選択肢はエ。アは「昔の口語体から」としている点が誤り。後半の「単に表面の言葉遣いを改めた」というのも的外れ。エのように「書き言葉の語尾を口語風に言い換えた」とした方がぴったりくる。イの「話し言葉と書き言葉が奇妙に入り交じった」というのもこの「語尾」の問題を踏まえていない。ウの「言葉を文章のなかから借用してきただけ」というのはここで論じられている内容ではない（これについては**問5・問6**あたりで検討していく）のでやはり的外れ。

問4　「自分の言葉で」という設問の指示は、「問題文筆者の言葉をそのままでは使うな」という意味に解しておくとよい。純粋な意味での「自分の言葉」（他の誰にも真似できない、自分オリジナルの表現）が求められているのではなく、解答者の側で同じ意味の別の（より一般性の高い）他の語に置き換えよ…ということが求められているのだ。

この「そういう」の指示内容は、直接には前行の「国内の老若男女が明けても暮れても、この調子で物を言ってくれるようになったら」（18行目）である。この「老若男女」とは「あらゆる人々」の意味であり、「明けても暮れても」とは「常に」「いつも」の意味である。この程度の言い換えはほしいところだ。

また、この部分にある「この調子」とは、前問で検討したような、「也をであるに改め、でありますに取り替えただけ」（17行目）の言葉遣いを指している。この点に関しても、「文語の文末を口語風に改めただけ」という程度の言い換えがほしい。

以上三点について、手短に言い換えることによって、三十字という制限字数はほぼ満たせよう。

問5 傍線部分に言う「羽織袴」という表現が、「口言葉には最初から、ふだんとよそ行きとの二通りのものがあり、一方はちょうど仕事着に対する晴の衣装のように……」（20～21行目）という比喩を受けてのものであることを踏まえれば、解答の道筋は見えてこよう。ここで言う「羽織袴」とは「口言葉」の中の「よそ行き」に相当しているのである。だとすれば、この部分の意味は「よそ行きでなくても、普段着で……」というふうに解される。このニュアンスをもっともよく反映させた選択肢はイ。アは「形式的な言葉を排除する」の部分がやや的外れ。エの「ふだんの言葉を改良して」というのでは逆である。「よそ行きの言葉」をやめる、というのがこの部分の主旨である。ウの「うわべだけ」―「質実」というのも、「よそ行き」―「普段着」の比喩にマッチしてはいない。

問6 「自分の言葉で」という指示の読みとり方に関しては**問4**と同様に考えておこう。ここでは「九官鳥」という比喩的な表現の意味するところを、一般的に通じるような物言いで言い換えることが主な作業課題となろう。

この「すんでのことに、九官鳥になろうとしていた」という表現は、前文の「今日までの外形教育などは、むしろ成功しなかったのを慶賀すべきもの」（25～26行目）という主張の延長線上にでてきている。この、「外形教育」とは、前問で検討したことにも関わるが、「仕事着に対する晴の衣装」のうち、後者＝「本来は用いる日がいたって少なく、かつ幾分かうわべだけの、空々しいもの」を重視しつつあった傾向を指している。だとすれば、ここで言う「九官鳥」のたとえは、「言葉のうわべだけを、意味も分からぬまま用いる」という意味に解されよう。このポイントを指摘するとともに、日本人全体がそういう「九官鳥」状態になりかかっていた……という筋で解答をまとめれば、出題者の要求を満たした解となろう。

【問題】（演習／共通問題2）

出典…『蜻蛉日記』　／　千葉大学　01年

現代語訳

（陰暦）三月ごろ（康保三・西暦九六六年・作者三一歳・兼家三八歳・道綱一二歳の年）、折も折、私の邸に来ていた時に（兼家は）苦しみだして、たいそうひどくもだえ苦しんでいるので、（私は）とんでもないことになったと思う。（兼家が）言うことには、「この邸にいたいのはやまやまだが、（病気平癒の加持祈禱、公務の指示発令など）何をするにしても、たいそう不都合であるにちがいないから、あちら（の本邸）へぜひ移りたい。（看病してくれているお前に対して）薄情な仕打ちをする（男だ）と思わないでおくれ。急に（この先）長くもないような気がするのが、ひどく切ない。ああ、（私が）死んでも、（あなたが）思い出しなさるにちがいないことがないことが〔＝いい思い出のよすがとなるようなことも、何ひとつしてさし上げられなかったことが〕、たいそう悲しいことだ」といって、泣くのを見ていると、（私は気が動転して）何も考えられなくなって、（私も）またひどく泣けてきてしまうので、（兼家が）「お泣きにならないでおくれ、ますます辛くなる。この世で（何よりも）辛いにちがいないことは、予想もしない時に、こんな（突然の病死による死）別をする羽目になることだ。（私が死んだらあなたは）どうなさるおつもりだろう。よもや独身を通すおつもりではあるまい。そうであったとしても〔＝再婚するにしても〕、私の忌中になさってはいけない。（私が）もし死ななかったとしても、（これが）最後と思うのだ。（私が）生きていても、とてもこちら（の邸）には伺えないだろう。私がしっかりしているような時は、どうであれ私に頼りきっていらっしゃるのがよいのだが、（それも叶うまい）と思うので、このままこうして（私が）死んだら、これが（あなたを）拝見する〔＝あなたとお会いする〕最後となるであろう」などと、（兼家は）横たわったままひどく悲しそうにかき口説いて泣くのだった。

あれこれ居合せた侍女たちを、呼び寄せながら、（兼家は）「私は、どんなに（お前たちの主人〔＝道綱母〕を）大切に思い申し上げていたと思うか。こうして（私が）死んでしまったら、二度とお目にかかれなくなってしまうのではないかと思うのがたまらなく辛いのだ」と言うと、（侍女たちは）皆、泣いてしまった。私自身はまして、何も言うことができず、ただひどく泣いてばかりである。

こうしているうちに、（兼家の）容態はいよいよひどくなっていって、牛車を（簀子縁の近くに）寄せて乗ろうとして、抱き起こさ

れて、（兼家は）人にすがって（ようやく）車に近づいた。（兼家は）ちょっとこちらを振り返って、じっと（私を）見つめて、たいそうひどく切なそうに思っている。残る（私）は、言うまでもない（辛さである）。私のもとにいる兄が、「どうして、こんなに縁起でもなく（泣くのです）。全くどんなことがおありになるでしょうか、何もおありではありますまい。〔＝格別何ということもございますまい。〕早く（車に）お乗りなさいませ。」といって、（兄も）そのまま（牛車に）乗って、（兼家を）抱きかかえるようにして本邸へ向った。（私の夫を）思いやる気持ちは、言い表しようもない。（私は）一日に二度も三度も（見舞いの）手紙を送る。憎らしいと思う本邸の女房もいるであろうと思うが、仕方がない。（兼家からの）返事は、あちら〔＝本邸〕にいる年配の侍女に命じて書かせて〔＝代筆させて〕寄越してきた。（その侍女からは）「『自分で手紙をしたためてさし上げられないのがつらいことだ』とばかり（兼家公は）申し上げなさっておられます」などと書いてある。いつぞやの折よりも〔＝作者邸で発病した時よりも〕ずっと容態がひどくなったと聞くと、（兼家が）言ったように、私自身の手で看病するわけにもいかず、どうしたらよいだろうなどと思い嘆いて（いるうちに）、十日余りも経ってしまった。

（僧侶などによる）読経や加持祈禱などをして、（兼家の病が）少し回復してきたようなので、案の定、兼家自身からの返事が来た。（兼家）「全く不思議なことに、（病気が）よくなる気配もなくて日数を重ねていたのだが、（今まで）こんな大病をしたことがなかったからであろうか、（回復するかどうか）気がかりで」などと、人目を忍んでこまごまとしたことが書いてある。

解答

問1　ア＝私のことを薄情な男だと思わないで下さい

イ＝兼家の病気が少し回復してきたようなので

問2　①＝作者　②＝兼家　③＝作者　④＝兼家

問3　(1)＝a

(2)＝「な」は助動詞「ぬ」の未然形で、ここは確述（強意）の用法。「む」は助動詞「む」の終止形で、ここは意志の用法。

問4 すぐに再婚してしまうこと。

問5 (1)＝兼家

(2)＝仮に自分が生き長らえたとしても、今後作者の邸を訪れることはできなくなるであろうということ。

問6 日に二たび～文をやる。［15行目］

問7 ①＝藤原（右大将）道綱母　②＝十　③＝後撰和歌集　④＝落窪物語

【問題】（自習／共通問題2）

出典…『中務内侍日記』「五　左中将へ東宮の御使」　／　九州大学　前期日程　92年

現代語訳

この世に生き続けていると何と言うこともなく忘れることのないあれこれも多く、（その中には）袖も濡れてしまうに違いない道理も思い知らされずにはいられないのが〔＝涙なくしては思い出せないのも当然なこともあるのが〕、（昔の思い出に涙をこぼすばかりでは照れくさくて）面映ゆく思われるのだが、とりわけ弘安六年四月十九日（の出来事は、忘れられない。それは、東宮の父君である後深草院が）いつものように（離宮である）嵯峨殿へお出ましになって（から内裏へ）お帰りになった。御（就寝になった）夜の後、（後の伏見天皇の）東宮さまは、（おもだった方としては）土御門の少将さんだけをお供として、（後深草）院の御所の方に人目を避けて（おいでになって、御所の夜景を）御覧あそばした。南殿の（正面のきざはしの左に植えてある）橘の花が満開のころだったので、（橘の花の）香を慕うホトトギスでも（やって来て鳴きはしないだろう）かと（期待して）、待っておいであそばすのだが、（やっとのことで聞けたのはたった一声で、聞く者に）思いを尽くさせる一声も（それだけではとても）物足りず残念（に思われたもの）である。

そのころ、左中将さんは、どんな事情があったのだろうか、（家に）引き籠もって長らく（東宮さまのもとに）参上しなかったので、（東宮さまは）有明の空に鳴いた（ホトトギスの）一声を、（左中将も、今時分は）寝覚め（の床の中で、私と同じよう）に聞いているだろうかなどと、もったいなくもお思い出しあそばした（その東宮さまのありがたい思いやり）は、（左中将さんの）夢の中にも通じていることだろうなぁと（私は）思いを馳せないではいられなかったが、

思ひやる……（あなたも今時分は寝床の中で、有明の空に飛び去るホトトギスの鳴き声を聞いているだろうかと）思いを馳せている（ところだが、そのように思いを掛けられているあなたの）寝覚めは、どんなものですか〔＝ほととぎすの鳴き声が耳に届くように、私の思いも夢の中に通いましたか〕、ホトトギスが鳴いて飛び去る（この）有明の空（の下での寝覚めは）

と（東宮さまから左中将さんへの思いやりを歌に詠んだ、その）御意向（を示すお言葉）があったので、（おそばに控えていた女官の）内侍さんが、（やっと字が読める程度の）かすかな有明の（月）明かり（を頼り）に（東宮さまの歌を）書きしたためて、橘の花に（その紙を結わえ）添え（て手紙に）なさった。

（左中将邸まで走らせるのに）適当な御使い（の者）もいなくて、（そのまま夜が）明けてしまいそうなので、土御門の少将さんが、（警護の）人も伴わずたった一人で、馬で（左中将さんに東宮さまの歌を届けに）行った。（左中将邸に着くと土御門の少将さんは）自分の手で馬の口（の手綱）を引いて門を叩くのだが、（家の者は寝静まっているのか、門を）すぐには開けなくて、空は（だんだんと白んで）明け方になる（様子）も、（その異例さが却って）驚くほど風情ある様子である。（やっとのことで）門を開けたところ（東宮さまの手紙を土御門の少将さん自身が、供も連れずに届けに来たので、左中将さんは）意外なことに呆気にとられたというようなのも道理である。取り立てて言うほどでもない（普通の人から受ける程度の）思いやりでさえ、（そのときの左中将さんのように家に閉じ籠もっている）場合には何となくも嬉しいものだが、（ましてや東宮さまからの）おそれ多い思いやりも深く、（また、味わい深い御所の橘にホトトギスの鳴く風景を、風情の共感できる相手として、）花の色彩も香りも（離れていても共に楽しもう）とお思い出しあそばした（東宮さまのお心づかいに触れるにつけて）も、御使い（を賜ったこと）の嬉しさは本当にどれぐらいのものだったろうか（、想像もつかないものに違いないだろう）。同じ立場であるような身の上は、実にどうして羨ましくないことがあろうか（、左中将さんのことが実に羨ましい限りであった）、（この出来事は左中将さんのことだが）世にも稀な名誉で、生きている身（の一生の間）の思い出だと、他人のことながら（私自身にも、身に沁みて）思い知られないではいられませんでした。（御使いに出ていた土御門の少将さんは、）ほのぼのと（夜が）明けるころに、（東宮さまのもとへと）帰って参上した。（その時に持参した左中将さんからの返歌は、次のようなものだった）

宮のうち……御所の中で鳴いて飛び去ったというホトトギス（が私の家にも訪れてくれるだろうかと期待して、そのホトトギスを）待っていた（のですが、残念ながら、ホトトギスの声を）期待する（私の）家からは今でもまだ（鳴き声が聞こえず）変わりばえはございません（ので残念です。しかしそれだけに、東宮さまのお優しいお言葉が心にしみいるばかりにありがたく存じます）

解答

問1 (1)＝この世に生き続けていると〔解答例〕

(2)＝面映ゆく思われるけれども〔解答例〕

(3)＝夜が明けてしまいそうなので〔解答例〕

問2　ア＝自発　イ＝尊敬　ウ＝自発　エ＝尊敬　オ＝自発

問3　a＝②　b＝②　c＝①　d＝④　e＝③

問4　ほととぎす

問5　夜も明けるか明けないかの時分に、土御門の少将ほどの貴人が供も連れずたった一人で、自ら馬の手綱を引き左中将邸を訪れたことが意外で「あさましく」、また東宮の心遣いを察し、一刻も早くそれを左中将に伝えようとする少将の思いを「をかし」と表している。〔120字・解答例〕

問6　取り立てて言うほどでもない普通の人からの思いやりでさえ、当時の左中将のように自邸に引き籠もっている時は何となくも嬉しいのに〔解答例〕

問7　橘の花の色の美しさもその香りのよさも共に楽しむことができるような情趣を解する相手として、左中将をお思い出しなさったことにつけても〔解答例〕

問8　同じように東宮に仕える立場であるような身の上は〔解答例〕

問9　左中将の家は今もほととぎすの声が聞かれず、変わりばえがないということ。〔35字・解答例〕

問10　思ひやる……＝②　宮のうち……＝④

解説

問1 (1)傍線部を品詞分解すると、「世（名詞）」＋「に（助詞）」＋「経れ（動詞）」＋「ば（助詞）」となる。名詞「世」は①「一生・生涯」、②「寿命」、③「時節」、④「世の中・世間」、⑤「男女の仲」など、様々な訳意が存在する語であるが、ここでは、後述するように連語的表現として、④の意で解釈する。ハ行下二段活用動詞「経」は、「得」「寝」と併せて語幹と語尾の区別のない下二段活用動詞として、覚えておきたい。訳意としては、①「時がたつ・経過する」、②「月日を送る・過ごす」、③「通過する」、④「経験する」等の意がある。ここでは文脈上②の意味で解釈する。さらに、接続助詞「ば」に上接して、《順接確定条件（確定条件・偶然条件・恒常条件）》となっていることも見落とさないようにしたい。さて、「世」に関わる連語・慣用表現は多く存在し、この「世に経」もその一つ。①「この世に生き続ける」、②「男女の情を解する」の意があるが、ここでは下接する「何となく忘れぬふしぶしも多く（＝何トイウコトモナク忘レラレナイアレコレモ多ク）」という表現から考えて、男女の情に関わるものとまで踏み込んで解釈することはしがたいので、①の意で解釈し、《順接確定条件》の訳出を合わせて、「コノ世ニ生キ続ケテイルト」という解答例のように訳出する。なお、この他の「世」に関わる連語・慣用表現として、「世に旧る（＝新鮮味ガナクナル）」、「世の限り（＝生キテイル限リ）」、「世の例（＝先例・世ノ習イ）」、「世の常（＝平生、平常、当然ノコト）」、「世を背く、世を逃る（＝出家スル）」、「世を憚る（＝世間体ヲ気ニスル）」等も覚えておきたい。

(2)傍線部を品詞分解すると、「かはゆく（形容詞）」＋「おぼゆれ（動詞）」＋「ど（助詞）」となる。形容詞「かはゆし」は、「顔映ゆし」の転化したものといわれ、自分に対して使用する場合は①「恥ズカシイ・面ハユイ」、相手に対して使用する場合は②「気ノ毒ダ・カワイソウダ」、③「カワイラシイ・愛ラシイ」等の意が生じるが、ここでは、自分の記憶・経験について使用されているので、①の意で解釈する。動詞「おぼゆ」は、「思ふ」の未然形に、《自発・可能・受身・尊敬》を示す上代助動詞「ゆ」が付いた「おもほゆ（おもはゆ）」から転じた語で、《自発》意を示す①「自然ト思ワズニイラレナイ」が原義。そこから②「思イダサレル」、③「思イ及ブ・ワカル」、④「似ル」などの意が派生し、また、他動詞として使用する場合、⑤「記憶シテイル・覚エル」、②「思イ出ス」などの意となる。ここでは「忘れぬふしぶし」について述べているので、①の意で解釈し、さらに逆接の接続助詞「ど」が下接しているので、逆接の意を加える。よって、「面ハユク思ワレルケレド」程度の意となる。

(3)傍線部を品詞分解すると、「明け（動詞）」＋「ぬ（助動詞）」＋「べけれ（助動詞）」＋「ば（助詞）」となる。下二段活用動詞「明く」は、ある期間が終わって新たな状態になることを示す意で、本文脈では、「有明（＝陰暦二十日ごろ以降の、月が空に

あるまま、夜が明けようとする時分）」という語が使用されていることに着目して、「夜ガ明ケル」意で解釈する。助動詞「ぬ」は未来時制を司る《推量》系助動詞に上接する場合、上位職能である《完了》意で解釈すると、未だ確定しない将来の事実について《完了》状態になるという論理的矛盾が生じるので、下位職能である《確述》（＝強意）意で解釈する。《推量》助動詞「べし」には、《当然》《適当》《意志》《命令》《勧誘》《推量》《可能》などの意があるが、ここでは「夜が明ける」という事実に対して、その発生を予想する《確信推量》意として「……シソウダ」程度に解釈する。さらにここでは、接続助詞「ば」に上接して《順接確定条件》となっているので、「……ノデ」の意を加える。以上を合わせると、「夜ガ明ケテシマイソウナノデ」程度の訳出を行うことができる。

問2　基本的な文法問題。ただし、「（ら）る」の職能識別は、入試でも出題頻度は高いので、取りこぼしのないよう、確実に押さえておきたい。各職能の識別法を簡単に確認しておく。

「泣く」「思ふ」などの心情表現を示す動詞や知覚動詞に下接した場合……《自発》意。
「……デキル」に置換できる場合……《可能》意。
「～に」型の連用修飾語が提示されている、もしくは補入できる場合……《受身》意。
動作主体に身分の高い人物が提示されている場合……《尊敬》意。

なお、《自発》および《可能》の用法には、命令形が存在しないこと、《可能》意の場合、基本的には否定表現（打消または反語）の中に用いられて全体で《不可能》を表し、打消表現なしに単独で《可能》を表現する用法は中世以降のものであること、《尊敬》意の用法のみ、文法上の主語と実質的な動作主が一致し、また原則として他の尊敬語の前後にはおかれない（ただし、「たまはる」「おほせらる」「おぼさる」「めさる」などの例外もあり、この場合は「（さ）す・しむ」とは逆に他の尊敬語の下に付く）こと、なども併せて覚えておきたい。

以上を踏まえて各傍線部を検討していくと、**ア**は直上に「知る」という知覚動詞があるので、《自発》意となる。**イ**は（直上に「御覧ず」という尊敬本動詞があるが）動作主体が「東宮」であり、文法上の主語と一致することから《尊敬》意となる。**ウ**は直上に「思ひやる」という心情表現が存在するので、《自発》意となる。**エ**は動作主体に「内侍殿」と尊敬接尾辞が付されていることに着目して《尊敬》意と解釈する。**オ**は直上に「思ひ知る」という心情表現が存在するので、《自発》意となる。

問3　動作主体を把握する問題は、接続助詞「ば・に・を・ど・が」の後の主語省略を伴う主体転換と敬語待遇に注意して判別を行っていきたい。

傍線部**a**を含む文では、主語は省略されているので、前文の主語をまず確認すると、「東宮」ということになる。ここで、前文の述部の敬語待遇を確認すると、「御覧ぜ」「らるる」と二重尊敬の最高敬語で待遇しており、傍線部**a**も同様に「せ」「おはします」と二重尊敬で待遇しているので、前文の主語をそのまま続けて使用しているため主語省略を行ったと考えられ、②が正解となる。

次に傍線部**b**を検討すると、まず、傍線部の直上に「左中将」と主体が提示されていることに目がいくと思うが、「参らざりける」「に」と謙譲表現が使用されている後に、接続助詞「に」が接合していることに着目したい。この接続助詞「に」の後の述部となる傍線部**b**は、「おぼしめし」と尊敬表現を使用しているので、「参らざるに」の後で動作主体が転換していると考えることができる。そこで、主体を確定するために「参らざる」の対象を検討すると、前段落では東宮のことについて述べており、また、後続文脈で東宮のお供をしている土御門の少将が左中将への使いに発ったことを考え合わせると、この動作主体は「東宮」と判断するのが妥当である。また、本文章での敬語待遇の軽重を検討すると、尊敬表現で動作待遇しているのは、東宮および内侍殿であるが、内侍殿の動作に関しては単純尊敬でしか待遇していないことにも着目したい。この点からも傍線部**b**の主体は東宮であると考えることができる。よって正解は②となる。（尊敬語の軽重を考える場合、細かく見ると、接頭辞・接尾辞の付加→助動詞「（ら）る」の付加→補助動詞→本動詞→助動詞「（さ）す・しむ」の付加された補助動詞→本動詞二重尊敬という順に軽重の度合いが高くなる傾向にある。たとえば、「思ふ」を例にとると、「思はる」（助動詞付加）→「思ひ給ふ」（補助動詞付加）→「思す」（尊敬本動詞）→「思し召す」（尊敬本動詞二重尊敬）といった具合である。しかし、大学入試では、「助動詞敬語」→「動詞敬語」→「最高敬語」の三段階の区別と、その地の文中・会話文中のそれぞれにおける使い分けが理解できれば十分である。）

傍線部**c**に関しては、敬語待遇がなされていないことに留意したい。さらに「思ひやら」「るる」と地の文において《自発》表現を使用していることを考えると、この部分の主体は作者であり、東宮の心中思惟に対しての評価を加えている部分であると考えることができる。よって正解は①となる。

次に傍線部**d**は、場面が変わり、土御門の少将が左中将の家に東宮の手紙を届ける場面であることを最初に押さえておきたい。そこで「門を開け」て、「思ひよらずあきれ」たと描写されているのであるから、この主体は門のうちにいる人間であり、④「左

中将」が正解となる。

最後に傍線部eは、同段落内の最後であり、「帰り参り」ということから、使いに行った③「土御門の少将」が戻ってきたことを示していると推定される。

問4　空欄補充の問題であるが、若干の古文常識が必要。ここでは、本文2行目に「四月十九日」という表記があること（陰暦表記であることに注意）から、季節は初夏であることに留意する。そこで各空欄の前後文脈を検討すると、順に「一声」「鳴きて」「鳴きて」とあることから、初夏において「鳴く」ものであることがわかる。また、二つ目・三つ目の空欄は和歌の中にあり、音節数を計算すると空欄の言葉は五音節（ひらがなで原則として五文字分）であることもわかる。そこで、夏を知らせる鳥といわれ、夏の歌材となる「ほととぎす」を補入することができる。

ちなみに「うぐひす」は、ほととぎすに対して「春告げ鳥」と呼ばれ、早春に鳴く鳥である。併せて確認しておきたい。古文の場合、各季節を示すものとして、その季節を象徴する動植物を引き合いに出すことは頻繁に行われるので、各季節を代表する鳥や虫は、関連づけて覚えておくようにしたい。ちなみに、「鳥」に関しては『枕草子』第四十一段「鳥は」において、ほととぎす、鶯、ともに触れられており、虫に関しては第四十三段で述べられているので、是非目を通しておいてほしい。

問5　内容把握系の問題。まず傍線部の語義を確認する。形容詞「あさまし」は、意外さに驚く意の動詞「あさむ」から派生した語で、善悪を問わず、意外さに驚きあきれる気持ちを示すことが原義で、①「意外デアル」、②「ハナハダシク、ヒドク……ダ」、③「アキレタコトデアル」、④「嘆カワシイ」、⑤「見苦シイ」などの意がある。また、形容詞「をかし」は、中古の美意識を代表する語。「あはれ」が主観的なしみじみとした情感を表すのに対し、知的興趣や客観的で明るい感じを伴って用いられ、①「情趣ガアル・スバラシイ」、②「美シイ・愛ラシイ」、③「カワイラシイ」、④「滑稽デアル」などの意がある。どちらも多義語だから、勝手に意味を特定してから読解するのは大変危険である。まずはそれぞれの原義を念頭に置いて、あまり意味を限定しないで、客観的に読みとれるところとの関係から意味を絞り込んで行くのがよい。

まず、「あさまし」の内容に関して考えると、直上に「土御門の少将、人も具せずただ一人、馬にて行きぬ。手づから馬の口をひきて門をたたくに」という表現があり、さらに傍線部の直後に、「門を開けぬるに思ひよらずあきれ」たという表現を合わせて

考えてみると、「少将という貴人が供も連れずに自ら馬の手綱を引いて人を訪れる」行為が意外で、「あさまし」という表現を生み出したと考えられる。

次に「をかし」の内容に関して検討すると、すぐ目に付くのは、傍線部直上にある「空は明け方になるも」という表現であるが、単純に情景描写に関する評価であると考えると、前に示された「あさまし」が少将の行為に関して述べられているのに対してバランスが取れないことになるので、ここは「明け方になる」という情景を示すことによって、少将の心情を婉曲的に表現していると解釈する。そこで、ここでの少将の行為が何に発しているかを考えると、届けようとしたものは東宮の左中将に対する心情を示した和歌であることから、東宮の心情を思いやってその気持ちを一刻も早く左中将に伝えたいという気持ちからこのような行為を行った、と解釈することができる。よって、以上の二点を踏まえた解答が正解となる。

問6 現代語訳の問題。傍線部を品詞分解すると、「さら（動詞）」＋「ぬ（助動詞）」＋「情け（名詞）」＋「だに（助詞）」＋「折（名詞）」＋「から（助詞）」＋「もの（接頭辞・名詞）」＋「は（助詞）」＋「嬉しき（形容詞）」＋「に（助詞）」となる。動詞「さり」は「さあり」の約であり、「ソノヨウデアル」の意となるが、ここでは下に続く《打消》助動詞「ず」連体形「ぬ」と合わせて連語表現となり、①「ソウデハナイ」、②「タイシタコトデハナイ」の意となる。本文脈では①の意で解釈を行うと指示するものが存在せず、差し支えがあるので、②の意で解釈する。名詞「情け」は対象を損なうまいとする感情を表す①「思イヤリ・人情・情愛」が原義で、そこから②「風流・情趣ヲ解スル心」、③「風情・趣」、④「男女ノ愛情」などの意が派生してくる。ここでは、文脈上、①の意で解釈する。副助詞「だに」は、①最小限の希望を表す「セメテ……ダケデモ」、②程度の軽いものを挙げ、言外に重いもののあることを類推させる「……デサエ」、③添加の意を示す「……マデモ」などの機能があるが、ここでは傍線部直後に「かしこき御情け（＝オソレ多イオ思イヤリ）」とあることに着目して、②の意で解釈する。名詞「折」は①「時節・季節」、②「時期・場合・ソノ時」などの意があるが、ここでは、②の意で解釈し、左中将の現在の状況を指すものと考える。当然、現代語訳には、どのような状況であるかを補入しなければならない。接頭辞「もの」は形容詞・形容動詞について「ナントナク・ドコトナク」というはっきりしない意を示す。この場合、形容詞「嬉し」との間に係助詞「は」が挿入され、より強調された表現となっている。以上を合わせると、「取リ立テテ言ウホドデモナイ普通ノ人カラノ思イヤリデサエ、当時ノ左中将ノヨウニ自邸ニ引キ籠モッテイル時ハ何トナクモ嬉シイノニ」程度の意となる。

問7　まず、前提として提示されている古歌の解釈を検討する。この古歌を品詞分解すると、「君（名詞）」＋「なら（助動詞）」＋「で（助詞）」＋「誰（名詞）」＋「に（助詞）」＋「か（助詞）」＋「見せ（動詞）」＋「む（助動詞）」＋「梅（名詞）」＋「の（助詞）」＋「花（名詞）」＋「色（名詞）」＋「を（助詞）」＋「も（助詞）」＋「香（名詞）」＋「を（助詞）」＋「も（助詞）」＋「知る（動詞）」＋「人（名詞）」＋「ぞ（助詞）」＋「知る（動詞）」となる。上の句は「アナタデナクテ誰ニ見セヨウカ、コノ梅ノ花ヲ」程度の意。助動詞「む」は文末用法で、自称（＝一人称）主語のため、《意志》意で解釈する。下の句は「（梅ノ花ノ）美シイ色モカグワシイ香モ（ソノスバラシサヲ）知ル人（デアルアナタ）コソガ理解デキルノダ」程度の意。つまり、この古歌は、歌を送った相手の情趣を解する心が深いことを讃えた歌であると考えることができる。これを踏まえて傍線部**C**を解釈していくと、まず、傍線部「おぼしめし出づる」の動作主体は敬語待遇の点から考えて（**問3**参照）、東宮と措定でき、「色をも香をも」と情趣を解する気持ちが高いと東宮が評価した人物は、「思ひやる」の和歌を送った相手である左中将ということになる。さらにこの場面で咲いている花は橘なので、これを「色をも香をも」の解釈に補填する。以上を合わせると、「橘ノ花ノ色ノ美シサモソノ香リノヨサモ共ニ楽シムコトガデキルヨウナ情趣ヲ解スル相手トシテ、左中将ヲオ思イ出シナサッタコトニツケテモ」程度の意で訳出することができる。

ちなみに本問で踏まえられた古歌は紀友則の作で『古今集』の春歌に所収されている。このように、古歌を暗示する文言を自作の文中に盛り込むことを「引き歌」と言い、引き歌した結果できたのが和歌であれば「本歌取り」と呼ばれるが、どちらも表現意図としては共通であり、「古歌のうち、直接引用しなかった部分に述べられていた内容を仄めかす」というものである。

問8　現代語訳の問題。まず、傍線部を品詞分解してみると、「同じ（形容詞）」＋「類（名詞）」＋「なら（助動詞）」＋「ん（助動詞）」＋「身（名詞）」＋「は（助詞）」となる。名詞「類」には、①「並ブモノ・ツリアウモノ」、②「同類（一般）」、③「仲間（人間）」などの意があるが、ここでは、直後に「うらやまし」という形容詞が使われている点に注目する。これは現代語とほぼ同義の言葉なので、左中将だけが東宮の思いやりを受けるという状況から、左中将と同列にある者たちに対して特別扱いの左中将を比較しての表現だろうと考えられ、③の意で解釈できる。助動詞「なり」は体言に下接しているので《断定》意で、また助動詞「む」は文中用法として使用され、体言に上接していることから《婉曲》意で解釈する。以上を合わせると、「同ジ仲間デアルヨウナ身トシテ」

となる。さらに、設問の「わかりやすく（＝具体的に）」という条件を満たすために、ここで左中将と筆者の共通項を考えると、東宮に仕えているという点において共通していると考えられるので、これを前述の逐語訳に補入すると、解答例のような解答が作成できる。

問9　形容詞「つれなし」は、元来「連れ無し」の意で、「周囲の者と関係ないさま・縁のないさま」が原義。そこから①「ソシラヌサマ・サリゲナイサマ」、②「冷ヤヤカナサマ」、③「何ノ変化モナイサマ」などの意が生ずるが、ここでは直上にある「今も」という表現から③の意で解釈する。そうすると傍線部内の解釈は「今モカワリガナイ」ということになるので、何がどう変化がないのかを検討して補入する必要がでてくる。そこで**問4**で補入した空欄部分を合わせた傍線部直上を見ると、「ほととぎすを待つ宿からは（＝ホトトギスヲ待ツ私ノ家カラハ）」とあるので、「ほととぎすを待つ状態に変わりがない」、と考えることができる。つまり、まだ左中将の家にはほととぎすは来ていない、と推定できるので、これをまとめると「左中将ノ家ハ今モホトトギスノ声ガ聞カレズ、変ワリバエガナイトイウコト」程度の解答を作成することができる。

問10　和歌を詠んだ主体を確定する問題。まず、「思ひやる」の歌について考えると、直後に「と御気色あれば」と敬語待遇をしていることから考えて、この和歌を詠んだ人物は、東宮であると比定することができる。さらにこの東宮の和歌は、左中将に対して贈られたものである。これは、歌の直前で東宮が左中将を思いだしており、また、その歌をわざわざ書いて、その場にいない人物に届けていることから、明らかである。したがって、《贈答歌（＝二人の間で取り交わされる歌。特に中古の貴族社会では社交上不可欠のものとされ、場面に応じた即興性が求められた。返歌に関してはなるべく早く返すのが礼儀とされた）》の観点から、「宮のうち」の歌の作者は左中将であると考えられる。よって、解答は「思ひやる」の歌が②、「宮のうち」の歌が④となる。